

藤間生大著

倭の五王



岩波新書

685



藤間生大著

倭の五王

岩波新書

685

藤間生大

1913年広島に生まれる

1936年早稲田大学史学科卒業

現在一歴史家

専攻一日本古代史

著書—「埋もれた金印」(岩波新書)「日本古代国家」
「日本民族の形成」(岩波書店)「東アジア世界
の形成」「やまと・たける」

後の五王

岩波新書(青版) 685

1968年7月20日 第1刷発行 ©

1969年1月30日 第3刷発行



著 者 藤 間 生 大

東京都千代田区神田一ツ橋2-3

発行者 岩 波 雄 二 郎

東京都板橋区板橋4-47-7

印刷者 白 井 知 一

発行所 東京都千代田区 株式会社 岩 波 書 店
神田一ツ橋2-3

落丁本・乱丁本はお取替いたします

三陽社印刷・永井製本

目次



岡山・平福古墳の陶棺

I	倭の五王とはだれか	1
---	-----------	---

一	さまざまな学説	3
---	---------	---

(1)	戦前における	3
-----	--------	---

(2)	戦後における	14
-----	--------	----

二	日本と中国	24
---	-------	----

三	歴史家に抹殺された王	36
---	------------	----

II	二つの五世紀史	47
----	---------	----

一	日本人の場合	49
---	--------	----

(1)	記紀における叙述	49
-----	----------	----

(2) 現代における研究	70
--------------	----

二 中国人の場合	84
----------	----

三 二つの五世紀史の比較	98
--------------	----

III 大王と豪族	103
-----------	-----

一 躍動する東アジアと日本	105
---------------	-----

二 五王とその歴史的環境	129
--------------	-----

(1) 讚(履中天皇)	129
(2) 珍(反正天皇)	136
(3) 済(允恭天皇)	147
(4) 興(安康天皇)	161
(5) 武(雄略天皇)	166

三 大和国家はなぜ日本の統一国家になりえたか	183
------------------------	-----

五世紀史研究のすすめ	193
------------	-----

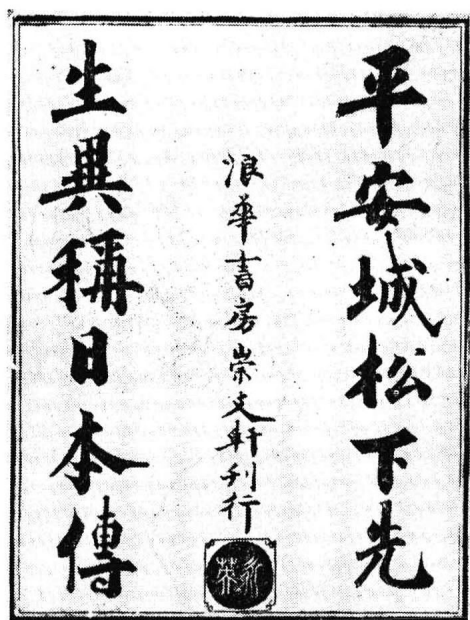
——あとがきにかえて——

年 表	199
-----	-----

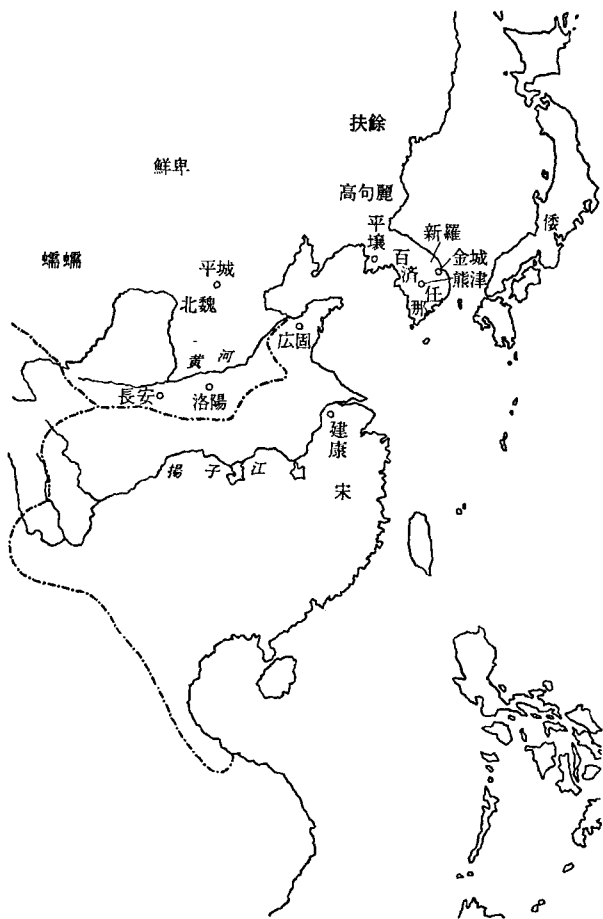
付 録

宋書倭国伝	203
-------	-----

I
倭の五王とはだれか



『異稱日本伝』(初版元禄元年刊)表扉の題字



五世紀の東アジア

一 さまざまな学説

(1) 戦前における

国際的精神と展望

倭の五王のことを初めて日本で問題にした人は江戸時代の国学者松下見林である。彼の著書である『異称日本伝』に、このことが出ている。本書を書くにあたって、私はまず彼のことから書きはじめる。

一六八八年の元禄元年九月の日付をもつ『異称日本伝』の序文の初めに、松下見林は次のようにのべている。「大日本国は神霊のたすける国である。国をひらいてより神聖な人があらわれ、神聖の道をうやまい、神聖のもっている立場をはつきりとさせてきた。国土をひらき、血すじをのこしてきた。たくさんの人々や国が中国に拝謁にいった。そのうちでもわが国を、礼儀の国だと中国ではいった。すなおな内にも優雅である。昔、中国で呉の国が破れた時、その国の君主姫氏が日本にきた。また暴政を行う秦の国にいた徐福も逃れてきた。そのみでなく、任那・斯盧（新羅）が膝を屈してくるようになり、周や漢の皇帝の流れをくむ者も日本にきた。神道と文明があり、民をいつくしみ物を大切にす政治があるためである。」

お国自慢である。しかしこのお国自慢は、世間によくみられるお国自慢とはどうも様子がちがう。礼儀の国である、素直でみやびやかな風格があるとはいうが、それは呉の国が破れて、その国王の姫氏が逃れて来たり、乱暴な秦の治世をおそれた徐福が逃れて来たのを受入れたような、他国の亡命者を喜んで受入れることの出来る国だから、そうなのだと松下見林は考えているようである。また国威発揚の例としてとりあげられていた任那や新羅の「降服」も、当方の日本が立派だから、先方がやって来たというのである。すなわち彼我の国際関係の成立を、当方の一方的な暴力と意志だけでなく、先方の選択があったからできたのだという発想法である。鎖国が行われて半世紀以上もたっている元禄時代に、こうした余裕のある国民性の把握の仕方が存在していたのである。

かつて同じ時代に出版された西川如見の『華夷通商考』^{（かいつうしやうこう）}という書物を例にして、一六、七世紀における日本人の海外発展の残照が、人民の胸奥に健康な広い視野を刻印しているということを、指摘したことがある（拙著『東アジア世界の形成』）。松下の場合にも同じことがいえる。特に彼の場合は、三十年にわたって『異称日本伝』にとりくんだので、なおさら彼の研究はしっかりとしたものになった。研究対象の関連事項が国際的な領域をもっているなら、困難でも研究の領域を広げ、その成果にたつて、日本の歴史をみるという、すなわち日本の歴史を一国だけの自己完結で把握しないという方法論は、日本では彼が初めてうちたてたといつてよい。しかし彼の議論は、これまで単純に理解されることが多く、天皇制擁護の国粹主義者とみられて

いた。このため彼の書いた本は、国粹主義者によって復刻がなされ、私が現在つかっている『異称日本伝』も、一九二七年出版の「皇学叢書」という叢書に入っている。時代の制約もあって、事実や考え方の上にもいろいろ誤まりが散見するが、国粹主義者の財産目録のなかに入れておくべきものではない。

『異称日本伝』

この『異称日本伝』は、日本のことを記した中国や朝鮮の文献をたくさん集めて年代的に並べあわせて、その中国の文献と日本の文献を比較して、『山海経』にでている倭の時代から、十五世紀末の秀吉の朝鮮侵略までの日本の歴史をのべたものである。現代の表現をもってすると「外国人の見た日本史」ということになる。松下は『日本書紀』から学んだ発想法だと序文で言っている。

『日本書紀』には晉の『起居注』『百濟記』など、いろいろな外国文献がひいてあり、『日本書紀』の歴史書としての価値を高めるのに役立っている。それにしても八世紀の奈良時代から『日本書紀』とその引用文献をみた人は多いが、こうした外国文献の引用を、「外国人のみた日本史」という体系にまでまとめ上げたのは彼がはじめてである。後世、信濃の人で学者の伝記を書いた東条子臈が次のように言っている。「今にして之を觀れば遺漏することなきに非ざるも、その博渉の勞は勤めたりと謂うべし。近時山本北山が異称日本史三百六十四卷、尾崎蘿月らげつが続異称日本伝三百三十卷、増島たいす禮水が異称日本伝事実百卷、岡部おかべ菊涯きくがが異称日本外史補遺百六十四卷の如き、各々見る所あり、以て考を資たすくるに足れり。然りといえども皆是れ見林

を待ちて興る者なり」『先哲叢談続編』卷三。

見林の歴史的評価としては的確である。それにしても鎖国下の日本において、こうした国際的視野の伝統が業績となつて蓄積されていたということは、見のがすことの出来ないことだ。

ただ、こうした仕事をするには、歴大な史料の蒐集が必要となる。幸い彼は計数の明るい人で、毎年長崎に人をやつて舶来の書物を求めさせることのできるほどの財産をもつてはいたが、医を業とする一介の市井の研究者である。研究条件の整備には苦勞をしたにちがいない。先の『先哲叢談続編』が記す次のような挿話を單なる学者の美談としてでなく、研究条件確保の困難ということで私は理解したい。「見林、編集する所異称日本伝、三十年を経てようやく成る。常に其稿数冊を一箇に蔵して、珍重甚だ至る。一日出行、近隣火を失し、家人子弟周章奔遽、先ず書笥を負いて之を池辺に避く。見林歸りて家に及んで曰く。日本伝恙なきや否やと。子弟答えて曰く。全しと。余は問う所なし。」

一個人松下見林のことをながながとのべて来たようであるが、彼についての旧來の紹介に不満があるからである。これまでわれわれが見林をとりあつかう態度というものは——彼は神武紀元千百年代の履中りちうちうその他の天皇を、中国の『宋書』に出てくる倭王讃さん以下の者に初めてくらべあわせた。この為中国の年代の計算からみて、神武紀元は六百余年長すぎる事がわかった——という程度のものである。したがつてその後は讃を履中であると見林は言つたが、仁徳とする見解もあるということで、彼は一説の所有者としてとりあつかわれているにすぎない。そ

こには先駆者の持つている積極的な精神と方法は見捨てられているのは誠に遺憾である。こうしたわれわれの現状を反省せざるを得ないので、見林の学説だけでなく、彼の個人的な風格と研究方法を紹介した次第である。

では次に本題に入って、倭の五王についての彼の見解を紹介したい。見林は『宋書^{*}九七列伝第五七夷蛮』の項目の所に出ている「倭国^{**}」の記事を全部引用し、そこに出ている倭王の名を、次のように解釈している。

* 『宋書』は梁の沈約^{ちんやく}が齊の武帝の命令をうけて四八六年につくった。四二〇年劉裕^{りゅうよ}が晉朝をたおして立てた宋王朝の歴史を書いたもので、劉裕の起りから四七九年までのことがのっている。倭の「五王」が使いを出して貢物をもって行ったのはこの王朝のことである。宋の前の晉朝には一度、宋の後の齊には一度（この方はあやしいが）しか使いは行っていない。

** これから以下、本書は日本をいうのに倭であらわす。日本という名称は、七世紀末の作製にかかわり、この時代にはないからである。

最初に出てくる倭王の名、讃^{さん}は履中天皇^{りちゅう}の名が去来穗別^{いさほ}であるから、そのよび名を略したのである。「さ」と讃^{さん}が同じというわけである。

二番目の珍^{ちん}は、反正天皇^{はんせい}の名が瑞齒^{すいし}別^{わけ}であるが、瑞の字は珍の字とくらべると形が似ている。このため「なままつて」珍となった。

三番目の済^{せい}は、允恭天皇^{いんきやう}の名が雄朝津間稚子^{おあまつまわこ}であるが、済と津の字は形が似ている。故に

「なまって」済となった。

四番目の興は、安康天皇の名は穴穂、これが「なまって」興となった。

最後の五番目の武は、雄略天皇の名が、大泊瀬幼武であるから、これを略して武としたのである。

* 天皇の称号は、七世紀にならないと出てこない。五世紀から七世紀の初めまでは、大王である。しかし便宜上、特定の「大王」をいう場合は、「天皇」の名称をつかうこともある。

見林はこの解釈のあとで、『南齊書卷五八列伝第三九東南夷』にのっている「倭国」の記事をのせ、そこに出ている「武」について次のようにいつている。「倭王武が称号をもらっている『建元元年』（四七九年）は、日本の清寧天皇が即位した年である。天皇の名は白髮武広国押稚日本根子である。略して武といったのである。」見林によると、武という同じ名前を持った二人の天皇がいることになる。不自然である。似た発音や字形を基にして人物のくらべあわせる方法がとられるかぎり、こうした事はおこりやすい。建元元年云々の記事で『書紀』の神武紀元や天皇の治世の年代を検討するのでなく、神武紀元で建元元年を考えようとする態度である。はじめて宋朝に倭王が使いを出した「永初、元嘉は本朝允恭天皇の時にあたる」と言いながら、この時に宋朝に使いを出した倭王讃は允恭より二代前の天皇である履中であると見林はいつている。矛盾している。こうした混乱はありながら、日本の人物を中国の年代に比定して位置づけようとしたことは日本古代史の原点を確立する上に大きな貢献をしたといえよう。もちろん

当時の見林には、現在のわれわれのように『記紀』に記された神武紀元が虚構のものであり、書かれた内容も事実と反するものがあり、史料としては活用し難いものがあるという認識はない。また年号を年代で考えることをしない。したがって、日中の歴史記事のくらべあわせが、当然ひき起すはずの革命的といってよい程の、彼の研究方法の意義は、彼自身にもわからなかった。

見林の指摘はその後積極的に研究されたような様子はみられない。決して無関心に通世以前と通世
うち捨てられたのではない。むしろ本居宣長の『馭戎慨言』で述べたように、宋朝

に使いを出して貢物を献上したのは、西方の豪族たちが、倭王の名をかたつてやったことである、日本の天皇たる者が外国に朝貢したり官職や位を授けられるといったことがあ
るはずはない、というのが、その理由である。しかしこの理由は理由にならぬ。あれほど柔軟な頭脳をもって古代史研究をやった宣長であるが、こうしたミスをやっている。これはしかし彼だけではない。同じく江戸中期の国学者の鶴峰戊申も同じような議論をやっている(『襲国偽
僭考』)。慣習となった発想法が、とりあげられるべき事実をみのがすことは、いつの時代にもよくあることである。しかしこのいきりたった態度は、『宋書』の記事をいろいろな人に注意させる一つのきっかけにはなったであらう。

すぐれた考証学者として有名な、幕末の伴信友は「中外経緯伝」という論文を書いている。まさに外交史である。しかし彼は、『魏志倭人伝』の記事を引用して卑弥呼のことは論じてあるが、『宋書』の記事はとりあげていない。宣長を尊敬してただけに、倭の五王の記事を敬

遠したのであろうか。

水戸学の系譜をひきはするが、手堅い考証史家である菅政友は、明治の中期に「漢籍倭人考」という論文を書いている。外交史である。

彼の見解によると、宋朝に使いを出して、任官を希望したのは、任那あたりにいた日本の使者が天皇の名をかりて勝手にやったことであるといいながら、倭の五王については、それぞれに天皇にあてはめて議論している。宜長の考え方の継承である。ただ彼によると讃は仁徳、珍は反正、履中がぬけているが、これは先方のあやまり、済は允恭、興は安康にあたるが、安康の死後、雄略がすぐに天皇になったのでなくて、履中の長子忍齒王が天皇になったとしている。政友の見解によると、倭の五王は一人の天皇をぬかしているというのである(本書の一六四ページ参照)。武はいうまでもなく雄略。仁徳と忍齒を出してきたのは、これまでに見ない所である。前者については讃が元嘉二年(四二五年)に使いを出しているが、元嘉四年は丁卯の年である。一方『古事記』によると仁徳は丁卯の年八月十五日に死んだ。ともに丁卯の年だから、讃は仁徳である。『古事記』に書いてある干支をそのまま信ずるわけであるが、仁徳はしたがって中国の年号である元嘉四年(四二七年)に死ななければならぬ。後者の忍齒王については、『播磨風土記』に「市辺(住んでいた地名)の忍齒の天皇」という用語があるので、それにたよるわけである。

政友から一世代あとに出た東洋史学者那珂通世は、倭の五王について画期的に研究をすすめ